

ICT 海外ボランティア会会報 No. 72

2017年5月1日(月)

目次

◆特別寄稿

真藤さんの人となり(3) 「奇を衒わず」

当会特別顧問 石井 孝氏

◆受賞おめでとうございます

日本 ITU 協会賞受賞者へのお祝い

事務局

◆JICA の動き

JICA 民間企業海外展開支援事業

事務局

◆国際交流基金の動き

「日本語パートナーズ」派遣事業の募集

事務局

◆海外グラフィティ

麗(うるわし)のスリランカ

日本ベンダーネット社長 エッセイスト 田上 智氏

◆海外 ICT 事情

競争激しいインドネシアのバイクタクシー市場

情報通信総合研究所副主任研究員 佐藤 仁氏

◆電友会アクティブシニア支援機構事業への参画

事務局

◆第 28 回海外情報談話会模様

事務局

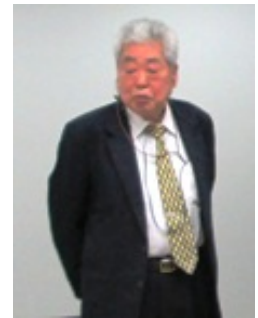
◆第 29 回海外情報談話会開催のご案内

事務局

真藤さんの人となり(3) 「奇を衒わず」

当会特別顧問 石井 孝

今回からは数回に亘って、真藤さんから直接指導を受け、其処から感じ取った真藤さんの仕事の流儀について述べてみる。



「奇を衒わず真正面から正攻法でコツコツと」

「電子交換機のソフト内製化」を目的とする新組織をスタートすると、一週間も経たないうちに、真藤さんから実行計画を持って来いというお達しである。電電公社流儀で、早速部下に実行計画を作るよう命じた。電々社員は良く出来る人が多い。早速、「ソフトウェア工学」の本などをかき集め、俄か作りではあるが格好の良い計画書が出来上がった。説明を聴いたが良く分からない、しかし格好は上出来なので何とか出来るだろうと、説明に出掛けた。

先ず計画書のコピーをお渡しすると、早速、無言でペラペラと捲り、途端に真藤さんの顔色がサット変わった。

「こんな事で、君、本当に出来ると思っているのか」大変な剣幕である。これは、格好を付けて誤魔化すことは出来ない、本音を言うしかないと咄嗟に観念した。

我々は自分をはじめ皆ソフト開発については「ど素人」、文字通りゼロからのスタートである。実のところは、如何してよいやらさっぱり分からない。しかし、先ずは、今使っているメーカーの造ったソフトを勉強する必要があるので、現行ソフトのコピーを行っているが、これとても膨大な量で手を焼いている。「内製化実行計画」などというのは、未だ先の、先の話であると、ついつい「ぶっきら棒」な言い方になってしまった。すると、真藤さんはニヤッと笑って、「それでいい」。その後は雑談で終わった。とんでもない人が社長になったものと思った。

此処で思い起こすことがある、二十代の頃、福富さん（電々公社総務理事をお勤めの後、日立の副社長）の下で、当時アメリカ（ベル研）のデットコピーであった日本のクロスバ交換機を抜本的に見直し、日本独特の経済性に優れた交換機に創り直す仕事の手伝いをさせて頂いた。

福富さんは、内外のあらゆる交換機の回路図を集められ、それらを丁寧に読ませ、その中から、これほと思う傑出した回路を探し出し、それらを分かり易い形に書き改めた回路図集を作るよう命ぜられた。これらを、新機種を設計するための基礎的な参考資料にされた。

氏はこうした地道な作業の積み重ねた上で、独特の設計思想（徹底した合理主義）を基に、世界に冠たる「C400型クロスバ交換機」を完成された。

真藤さんの得意な台詞に「習って覚えて真似して捨てる」というものがあるが、偉い人のやることはみな同じだと、つくづく思ったものである。

こうした方々の基本理念は、奇を衒わず「原理・原則に則った徹底した合理主義」なのである。真藤さんの宿題を何とかこなせたのも、若い頃に福富さんの薫陶を受けたからではないかと思っている。

「豊富な専門知識と専門外知識を持ち、それらを支える常識と厚みのある人生観」を有する優れた師に出会う、人生にとってこんな幸運は他にない。

「初めに習ったことを捨てる」

私たちの仕事は模倣の連続である。習って覚えて真似して実行する。ここまでは誰でもする。ところが仕事に関連する技術は、日進月歩の勢いで変化しているから、これを取り入れると、いままでの仕事で生まれたものが改良されて出てくる。ここにきて初めて、最初に習ったことを捨てる結果になる。

捨てるということが、世の中の進歩のためには重要な概念である。

捨てるためには新しいものをみつける能力が必要だ。一つは専門知識、専門外知識であり、そしてもう一つは、それらを支える常識と厚みのある人生観である。

受賞おめでとうございます

日本 ITU 協会賞受賞者へのお祝い

事務局

日本 ITU 協会は 4 月 11 日、本年度の日本 ITU 協会賞等の受賞者を発表しました。ICT 海外ボランティア会(ICTOV)に関係のある方々の中からも、日本 ITU 協会賞功績賞に平良寛樹様(元 NTT 東日本)、高橋謙三様(電気通信大学)、土橋康輔様(BHN テレコム支援協議会)、中井博様(同)、平山守様(JTEC)、日本 ITU 協会賞奨励賞に山上大様(NTT 東日本)などの方々が受賞されました。受賞者の皆様、誠におめでとうございます。

https://www.ituaj.jp/?page_id=12666

JICA の動き

JICA 民間企業海外展開支援事業

事務局

JICA 事業については、円借款、無償資金協力、技術協力などを思い浮かべる方が多いと思いますが、以下のような民間企業への海外展開支援事業についても注力しています。

- ・ 中小企業海外展開支援事業(基礎調査、案件化調査、普及・実証事業)
- ・ 途上国の課題解決型ビジネス(SDGs ビジネス)調査
- ・ 民間技術普及促進事業
- ・ 協力準備調査(PPP インフラ事業)
- ・ 民間連携ボランティア
- ・ 国際協力キャリア総合情報サイト(PARTNER)
- ・ 日本センター

- ・アフリカの若者のための産業人材育成イニシアティブ(ABE イニシアティブ)、等

今回は、NTT データがベトナム国電子医療情報システム普及促進事業で 2016 年度採択された民間技術普及促進事業についてご紹介いたします。皆様の関係企業等においても、本事業への応募可能性についてご検討いただければ幸いです。

民間技術普及促進事業の概要

1. 目的

日本の民間企業等が持つ優れた製品、技術、システムは、途上国の社会・経済開発に貢献し得る大きな可能性を有しています。本事業では、開発途上国の政府関係者を主な対象に、日本での視察や現地でのセミナー、実機を用いたデモンストレーション活動等を通じて、技術への理解を促します。本事業が契機となり、途上国関係者との間に人的ネットワークが形成されると共に、技術の理解が深まることで、民間企業等の現地展開に弾みがつくことが期待されます。

2. 本事業の対象となる活動内容

- ①本邦への受入活動：我が国の関連制度の講義、民間企業等の製品・技術・システム等の運用現場視察及び技術指導、等
- ②開発途上国での現地活動：民間企業等の製品・技術・システム等に係るセミナー及び技術指導、製品の理解促進を目的とした実機を用いたデモンストレーション活動、等

3. 事業規模(目安)：1 件あたりの 上限額 2 千万円

4. 協力期間：契約締結日から 2 年以内

5. 対象企業：本邦登記法人(会社法上の外国会社、特定非営利活動法人、自治体は対象外)

6. 主な対象先：JICA の在外事務所等が存在する開発途上国(約 90 か国)の政府関係者

7. 契約方式：採択企業への業務委託(補助金事業ではない)

8. 採択実績：2013 年から提案 317 件、うち採択 89 件 (2017 年度春募集は 10 件程度)

9. 負担経費：人件費(外部人材活用費のみ)、旅費、機材製造・購入費、輸送費、現地活動費、本邦受入活動費、管理費

10. その他：詳細は下記サイトをご参照ください。

https://www.jica.go.jp/activities/schemes/priv_partner/kaihatsu/index.html#kouji

民間技術普及促進事業の採択実績(ICT 関連等を抜粋)

No	国名	提案代表者	共同提案者	案件名
1	ベトナム	日立製作所		ICT 活用によるサステイナブルな防災・減災システム普及促進事業
2	トルコ	富士通九州システムズ	富士通	ICT を活用したスマートアグリ(畜産・施設園芸)普及促進事業
3	インドネシア	日本電気		農業生産性向上のための複合センシング技術普及促進事業
4	モロッコ	住友電工		ワルザザトにおける集光型太陽光発電システム(CPV)普及促進事業
5	ミャンマー	きんでん	住友商事	日本式配電技術訓練システム普及促進事業

6	ブラジル	日本無線		パラナ州雨量レーダ普及促進事業
7	インドネシア	アライドテレシス	(一社) Medical Excellence Japan	医療施設の情報ネットワーク標準化普及促進事業
8	フィリピン	東京エレクトロニクスシステムズ		iSPEED 緊急医療支援システム普及促進事業
9	インドネシア	日本電気	住友林業	森林火災監視・即応システム普及促進事業
10	メキシコ	オムロンヘルスケア		スマホアプリ肥満解消プログラム普及促進事業
11	ベトナム	NTT データ		電子医療情報システム普及促進事業

国際交流基金の動き

「日本語パートナーズ」派遣事業の募集

事務局

国際交流基金は5月10日から、マレーシア4期、ブルネイ3期、シンガポール4期の日本語パートナーズ派遣事業の募集を開始いたします。海外と日本の架け橋になりたい方、一生に一度は海外で(旅行・出張ではなく)日常生活したい方など、ぜひ奮ってご応募ください。

1. 趣旨

幅広い世代の人材をアセアン諸国の主として中等教育機関へ派遣し、現地日本語教師と学習者の日本語学習のパートナーとして、授業のアシスタントや会話の相手役といった活動をするとともに、教室内外での日本語・日本文化紹介活動等を行い、アセアン諸国の日本語教育を支援する。同時に、日本語パートナーズ自身も現地の言語や文化についての学びを深め、アセアン諸国と日本の架け橋となることを目標とする。

2. 活動内容(期間は10か月程度)

- (1)現地日本語教師が行う授業への協力
- (2)授業の教材作成等への協力
- (3)授業や課外活動における生徒との交流、等

3. 待遇

滞在費(シンガポール3期の場合、税引後月額15万円程度)、往復航空券、国内交通費、住居等が提供される。

4. 応募要件

- (1)満20歳から満69歳で日本国籍を有する方
- (2)日常英会話ができる方(英語で最低限の意思疎通が図れる程度)

(3)派遣前研修(約1か月間)に全日参加できる方

(4)心身ともに健康な方、等

(注)日本語を教えた経験がなくても良い。特技のある方、人生のキャリアを積んだ方、アセアンとの交流に熱意を持った方の応募が期待されている。

<http://jfac.jp/partners/overview/>

また、募集説明会が東京・大阪・札幌・仙台・静岡・名古屋・神戸・鳥取・中津(大分)・別府・福岡・那覇で開催されます。 <http://jfac.jp/partners/event/>

海外グラフィティ

麗(うるわし)のスリランカ

日本ベンダーネット社長 エッセイスト 田上 智



かつて、スリランカに2年滞在した。映画タイタニックで、伝説のブルーダイヤモンド「ハート・オブ・ジ・オーシャン」が出てきたが、あれは、スリランカ産のブルーサファイアが本当のところ、宝石商を営むモズレム(イスラム教徒)からの借り物だった。スリランカと言えば、①宝石②紅茶である。

ゴルフなど一切やらずに、毎週土曜日には妻と宝石商を巡った、というより、なじみの宝石屋に入りびたりであった。合計35個の宝石を帰国するまでに求めたが、スリランカは世界で第4位の宝石産出国で、一言でいうと、ダイヤモンド、エメラルド以外は全部出る。日本人は異常にダイヤモンドに執着するが、少し視点をずらせば、多彩な宝石類を楽しめる。ご承知のとおり、硬度7以上が貴石で、ダイヤモンド、ルビー、サファイアで、スリランカは上質のサファイアを多く産出するが、ブルー、ピンク、イエロー、ホワイイトなど実に多彩だ。ホワイイトは、見た目はガラスの破片と見間違ふ。ガーネットやキャッツアイもよいものがあるが、ルビーはどうも近隣のミャンマーやインドには負けるかもしれない。硬度6以下の半貴石が面白い。アメジスト、スピネル、ムーンストーンなど実に美しい。最後には宝石を見ただけで、何カラットでいくらと言いついて当てられるようになった。

紅茶も世界3大紅茶、ダージリン(インド)、キーマン(中国)と並んで、ウバを栽培している。金・銀色に輝いていて見て楽しむ、ゴールデンチップやシルバーチップはさておき、産地ごとにヌワラエリア、キャンディー、ルフヌ、ディンブラもあり微妙に味が異なる。かつて、イギリスの植民地であったが、現在、1日に7回もイギリス人に紅茶を嗜む文化をもたらしたのだ。日本に聴き茶の文化もあるが、かつて製茶工場に赴き、50種類くらいの紅茶を試したが、素人の舌には判別が難しい。

かつて、スリランカは“セレンディブ”と呼ばれた。古いペルシャの寓話のなかに、「セレンディブと3人の王子」の物語があり、旅の中で「予期せず素晴らしいものに出会う」わけだが、そこから、そういうものに出会う才能を「セレンディピティ」と言われる言葉が生まれた。アラビアンナイトのなかで、シンドバットが最初に上陸したのが、セレンディブで物珍しい素晴らしいものがあふれていることが当時のアラビアの世界ですでに知られていたに違いない。

「セレンディピティと近代医学」—独創、偶然、発見の100年—という書物が最近発刊されたが、医学の世界でも、偶然の発見で人類に貢献してきたペニシリン、ストレ

プトマイシンなど枚挙にいとまがない。親戚に医者が出て、戦前、国民病と言われた「結核菌」をシャーレで培養していた時、なぜかカビで結核菌が崩れる現象が起きたが、「化学」の知識があれば、ストレプトマイシンを発見できたのにと残念がっていたのを思い出す。

「麗（うるわし）のスリランカ」を想起するたび、様々な不思議を思い浮かべて楽しい（了）

海外 ICT 事情

競争激しいインドネシアのバイクタクシー市場

情報通信総合研究所副主任研究員 佐藤 仁

東南アジアの大都市の道路はいつも大渋滞だ。そのため昔から、バイクタクシーは一般的で、現在でも多く存在している。インドネシア、タイ、フィリピン、ベトナムでも路上で客待ちをし、値段交渉をして、客をバイクの後ろに乗せて目的地に運んでいる。

副業でバイクタクシーをやっている人も多い。バイクタクシーは現地人にとっては重要な足であり、日常に根付いた移動手段だ。車で移動したら渋滞で何時間もかかるような道も、バイクなら早く到着することが可能だ。



特に電車がほとんど整備されていないインドネシアの首都ジャカルタの交通渋滞は凄い。道路は通勤時だけでなく常に渋滞している。

一方通行の道路も多く、事故などで封鎖されていることもあり、さらに渋滞を加速させている。

ジャカルタでは、昔から Ojek（オジェック）と呼ばれるバイクタクシーが一般的だ。現在でも「Ojek 乗り場」のような「バイクの溜まり場」が道路沿いにあり、そこでバイクタクシーの運転手に行き先を告げて乗る。

（写真1）スマホで簡単に呼べるバイクタクシーはインドネシアで大人気

スマホで呼べるバイクタクシーが人気

ところが、この1年くらいで現地のバイクタクシー事情が大きく変わった。町中に緑色のジャンパーとヘルメットを着用した「GO-JEK」と「Grab」社のバイクがやたらと目立つようになった。これが新しいバイクタクシー運転手のスタイルで、インドネシアのバイクタクシーは、ほぼ GO-JEK と Grab の 2 強状態になった。GO-JEK は現地企業だが、Grab はインドネシアだけでなく東南アジア諸国で事業展開しており、2014 年 12 月にはソフトバンクも出資している。ホンダも 2016 年 12 月に同社とバイクシェアリングで協業することを発表した。GO-JEK と Grab は配車アプリ Uber のバイク版のような

もので、スマホで誰もが気軽に呼べるバイクタクシーだ。この ICT ボランティア会の会報読者のうち、どのくらいの人がタクシーをスマホで呼ぶ人がいるか不明だが、現在ではタクシーは流しで捕えたり、電話で予約をするよりもスマホのアプリで簡単に呼んで、決済もスムーズにできるのだ。2017年4月には Grab は地元の Kubo という e コマースプラットフォーム企業を買収、これによってさらに決済機能の利便性が向上することが期待されている。

利用者は今までのようにバイクタクシー乗り場に行って交渉する必要はない。スマホのアプリで、近くにいるバイクタクシーを見つけて、必要なところまで来てもらい、目的地まで行く。両社とも料金も明瞭で、アプリでの支払いもできる。バイクの運転手も常にスマホを持って、客からの呼び出しが来ないかチェックしている。以前のバイクタクシーよりもかなり効率的になった。インドネシアではスマホがかなり普及しており、ジャカルタのような都会では学生から大人までほぼ全ての人が所有している。また、バイクタクシー自体は昔から慣れ親しんでいるサービスなので、新たなビジネスモデルもあつという間に広がっていった。

バイクタクシーの運転手をしていた人たちが、そのまま GO-JEK や Grab で運転手をやっていることが多いようだが、サービスもかなりよくなった。従来のように、外国人だからといって不透明な料金面を請求されることはなく、安心して利用できる。クレジットでの支払いも可能で利便性も向上した。また、従来バイクでは誰が利用したかわからないヘルメットを、そのまま装着せざるを得なかったが、現在ではマスクと頭にかぶるネットを提供してくれる。運転手の緑色のジャンパーも清潔だ。

現在、ジャカルタでは GO-JEK の方が優勢だ。その人気の理由は、バイクタクシー以外にも荷物の配達、買い物の手伝い、食事のデリバリーなども行ってくれるからである。インドネシア人はあまり家庭で料理を作らないため、屋台やレストランで食事をしたり、デリバリー（出前）で済ますことが多い。GO-JEK は客から希望の食事を聞いて買ってきて、それらをバイクで自宅やオフィスなどにも届けてくれるので評判がいい。また買い物の手伝いも、客が頼んだ商品をスーパーや市場などに行って購入し、家まで運んでくれるきめ細かい親切さが受けている。



（写真 2）出前や買い物をバイクで宅配してくれるので大人気の GO-JEK。裏道でも迎えに来てくれるし、連れて行ってくれるので便利。

バイクは持つより呼ぶ

多くの人がスマホでバイクタクシーを利用するようになり、バイクを所有する人が減少している。かつては、バイクを所有することは一種のステータスシンボルのようところがあって、無理をしても月賦でバイクを購入していた。現在でもバイクは生活必需品という人が多い。だが最近では、バイクを購入するよりも自動車を購入する傾向が増加している。また自分のバイクは渋滞、盗難の心配、駐車場の問題、帰りにお酒が飲め

ないなどの問題があるので、通勤や通学時にはバスやバイクタクシーを利用するようになった。

バイクタクシーの増加によりバイクの個人所有が減っていることは、バイクメーカーのホンダがいつまでもバイク製造・販売だけに頼れないことを意味している。そこで、Grab との提携など新ビジネスへの対応は非常に重要になってくる。ホンダだけでなく、日本のバイクメーカーは東南アジアでは大人気だから、これから、他メーカーも何らかの形で追随してくる可能性が高い。

ホンダは 2016 年 12 月に Grab と提携する際のプレスリリースの中では以下のように述べている。「近年、『シェアリングエコノミー』と呼ばれるモノの共同利用活動がグローバルレベルで拡大していることに伴い、東南アジアの二輪車市場においても、「所有」



から「共同利用」へと使用形態が広がる兆しが見えています。この環境下で、Grab社がモビリティシェアリングビジネスで培ってきた知見と、Honda が持つ二輪車のラインアップ、販売網やサービスなどのリソースを活用し、東南アジアでの試験的な取り組みを通して、シェアリング領域での新しい移動サービスの実現を目指します。」

もはやバイクは所有する時代ではなく、必要な時に呼び出すものになったことをバイクメーカー自身も認めていることがわかる。

(写真 3) 近くにいる利用者からの呼び出しがないかスマホをチェック中の運転手たち

日本人には車の移動がお勧め

最後に、インドネシアに慣れていない日本人がバイクタクシーを利用することはお勧めしない。ICT ボランティア会会報の読者は海外に慣れている人が多いかもしれないが危険だ。バイクタクシーの運転手で英語を話せる人はほとんどいないこともあるが、同地の道はまだ整備されていないし、砂埃も酷いし、下水道が完備されていない場所やゴミが放置されていることも多く臭いがきつい。バイクだから当然冷房もないので、乗っていると非常に疲れる。さらに、雨期には突然スコールが降ってきてびしょ濡れになることもある。移動中に大雨が降ってきた時は運転手と一緒に雨宿りすることにもなるし、雨で運転手が迎えに来れないこともある。軽い雨の時には雨合羽を貸してくれるが、着用しての乗車は危険だ。また、とにかく渋滞を避けようと前へ前へと進もうとするので、他のバイクの運転手とトラブルを起こしたり、信号で停止すると運転手は常にスマホをチェックしているので、交通事故に巻き込まれる危険性も自動車より高い。渋滞によるストレスで喧嘩や接触事故などのトラブルが多発することも問題になっている。たとえ渋滞に巻き込まれるとしても、インドネシアに慣れていない日本人は自動車での移動が無難なのである。まして本会報の読者は新興国での経験が豊富とはいえ、電電公社や NTT という先進国日本の巨大企業育ちで、仕事で行っていた新興国でもかなりいい生活をしてきた人たちだろう。このコラムを読んでから「ちょっとインドネシアでバイクタクシーを試してみよう」などと思わないでほしい。交通渋滞に我慢してでも冷房の効いた自動車で移動してください。身の安全は保証できません。



(写真4) 乗車前に清潔なネットをくれるので、女性でも安心してヘルメットをかぶって乗車できるのも人気の1つ。

(写真5) 気さくなバイクタクシーの運転手。スマホでいつも乗客からの予約をチェック。ぼったくられる心配はなくなった。でも日本人は乗車しない方が良い。

(写真は全て筆者撮影)



就業促進の動き

電友会アクティブシニア支援機構事業への参画

事務局

電友会が本年3月設立した特定非営利法人アクティブシニア支援機構(ASO)の「就労支援団体育成モデル」事業について、ICT海外ボランティア会(ICTOV)は下記の背景等から積極的に参画することといたします。

1. ICTOV を廻る背景

- ① 日本政府の日本再興戦略において、5年間に1万社の新規海外展開を目標に設定
- ② 国内飽和のため、中小企業自体も海外展開せざるを得ない
- ③ 日本政府は民間企業OBによる中小企業支援を促進
- ④ ICT系中小企業は海外展開の社内人財・社外コンサルタント不足に直面
- ⑤ 関係省庁による関連企業の海外展開支援(ICT系海外展開支援の出遅れ)
- ⑥ NTT東西の活発な中小企業開拓と連動すべき
- ⑦ 民営化した途上国通信事業者への支援が停滞(民間事業者へのODA不可のため)
- ⑧ 海外から日本へ進出するICT系中小企業等への支援充実を期待

2. ICTOV の特徴

- ① ICT海外活動に関する専門家集団(会員・賛同者500名超)
- ② 海外活動を経験したOBが多い(NTT等の海外事業活発化に伴い、さらに増加)
- ③ 就労を通して生きがいを求めるアクティブ人財(高品質・低廉な雇用等の可能性)
- ④ 首都圏を中心に、全国展開を推進中(将来的には、海外展開を目標)

3. 今後の進め方

①ASOの動向等に合わせ、ICTOV会報等により、各種業務の就労希望者を広く募集いたしますので、奮ってご応募ください(詳細は別途ご案内)。

②緊急応募等で時間的な余裕がない場合、個別メールを配信する予定です。このような個別メール配信を希望される方は下記連絡先にご氏名及び就労促進個別メール配信希望の旨をご連絡ください。

<連絡先> 事務局 info.ictov@network.email.ne.jp

談話会の話、あれこれ

第28回海外情報談話会模様

事務局

第28回海外情報談話会が2017年4月19日(水)15時～17時、(一財)海外通信・放送コンサルティング協力(JTEC)及びWeb会議において開催された。講師は橋本了様(元NTTインターナショナル社長、元スリランカ・テレコム社長)、演題は「NTTにおける海外活動の変遷」であり、参加者はJTEC会場29名、Web参加4名(4か所)であった。

ODA、専門家派遣、技術協力プロジェクト、社内人材育成から、国際調達、電電公社民営化前後、その後の活発な海外事業展開まで幅広く話された。時々、あまり知られていない逸話・内輪話の紹介もあり、ご経験の豊富さと実話の迫力が感じられた。以下にいくつかの話題を列挙する。



- ・クウェートプロジェクトの人財はグローバルの洗礼を受けた第一陣であった。人材確保するため、人事の自己申告書に海外希望の項を新しく追加したところ、若い人はかなり○を付けて提出していた。
- ・国際調達室の頃は日米貿易摩擦問題もあり、米国製プッシュホン(英語文字盤)の購入、ノーザンテレコムのDMS10を400～500台導入した。
- ・ロンドン駐在事務所時代は各国通信キャリアの全盛時代であったと思う。キャリア間の競争も熾烈なものがあり、真藤社長がロンドンに来てグローバル化の構想を述べた。
- ・ロンドン事務所からそのままジュネーブのITU-Tで電気通信開発センターに勤務することとなり、2年間で20プロジェクトを担当した。
- ・1990年初頭から海外投資時代になった。このままではアジアの通信事業は欧米キャリア勢にとられてしまう危機感があり、日本政府は国際事業をNTT事業の付帯事業とすることとした。
- ・中南米の電話会社との提携等は事前に情報が漏れてうまくいかなかった。しかし、その後、浅田国際部長が強力に牽引し、タイ、インドネシア、ベトナム、スリランカ、フィリピン(スマート)、シンガポール(スターハブ)などに投資した。タイは当初100万回

線、その後、増設 50 万回線の建設・運営であり、大プロジェクトであった。最終的には、TT&T、スリランカ・テレコムは株式売却したが、ベトナムは大幅黒字となり、スマートは現在も高いリターンを上げている。

・NTT インターナショナルは当初大変だったが、すぐに優良企業となり、その後、NTT コムに吸収された。中国進出にあたっては厄介な話もあった。

・浅田さんは年間 260 日海外出張したが、田上さんは 280 日海外出張したとのことだ。



質疑応答では、スリランカ・テレコムの株式売却経緯、フィリピン(スマート)の事業展開、各国インフラ事業への対応、海外人材育成のあり方など、活発な意見交換があった。

今回は、談話会として初めて Web 会議による全国展開を試みた。最初、事務局の不幸で音声片通話となったが、再起動後、クリアな映像と音声は確保され、遠方ではなく、あたかも隣室にいる感覚で進行できたと思われる。いつか海外とも接続し、「海外情報」談話会で海外との生の情報を受発信したいと考えている。今後とも皆様の海外情報談話会へのご参加をお待ちしている。

お知らせ

第 29 回海外情報談話会開催のご案内

事務局

第 29 回海外情報談話会を下記のとおり開催いたしますので、奮ってご参加ください。

1. 日時 2017 年 5 月 24 日(水)15 時～17 時
2. 場所 (一財)海外通信・放送コンサルティング協力(JTEC)及び Web 会議(注)
東京都品川区西五反田 8-1-14 最勝(さいしょう)ビル 7 階
<http://www.jtec.or.jp/about/access.html>
3. 講師 (株)ジャパンリーコム 国際ビジネス開発部 通信網設計技術部門長
山口 順也様(本年 2 月まで駐ブータン JICA 専門家、元 NTT 東日本)
4. 演題 「ブータンの一般事情と ICT 化動向」
5. 定員 35 名(先着順、どなたでも参加できます)
6. 参加費 無料
7. 申込方法 参加ご希望の方は、下記連絡先にご氏名及び談話会参加希望の旨をご連絡ください。
<連絡先> 事務局 info.ictov@network.email.ne.jp

(注)Web 会議へのご参加は東京首都圏以外からのご参加に限定いたします。ご氏名及び談話会参加希望の旨のほかメールアドレス及び参加時の県名(海外は国名)をご連絡ください。Web 会議への参加方法は次のとおりです。

①次のサイトで初回のみ、Zoom Client for Meetings(サイトの一番上にあるもの)をダウンロードし、インストールする(無料)。Zoom はクラウドベースの Web 会議システムであり、パソコン、スマホ、タブレットのいずれでも可能です。 <https://zoom.us/download>

②Web 会議の案内が開始 5 分前までにメールで届くので、メールで指定された会議室に入室する。

本年 2 月までブータンで JICA 専門家として奮闘された山口様のホットな話題満載です。乞うご期待！

会報をお読みの方々へのお願い

会報に関する皆様のご感想、ご意見、ご要望等は、会報作成のみならず、当会の運営にあたって大きな方向づけに役立ちますので、どうぞご遠慮なくお送りくださいますようお願い申し上げます。

<送付先> 事務局 info.ictov@network.email.ne.jp 又は
会報担当 村上 勝臣 katsumi.murakami@jcom.home.ne.jp

編集後記(編集長から一言)

毎回ご寄稿いただいている田上様が 7 月 25 日、NTT 北陸電友会石川県支部定期講演会(約 200 名参加予定)で講演されるとのことです。全国に向けて活発に情報発信される姿を見習いたいものです。

当会においても 4 月 19 日、初めて全国 4 か所と Web 会議で接続し、海外情報談話会を開催いたしました。今後とも拡大・定着化を図り、全国さらには世界に向けて情報発信していきたいと思っています。(宮城県 村上 勝臣)

発行： ICT 海外ボランティア会(ICTOV)

会報担当： 村上 勝臣(編集長兼広報部長)、山川 博久(事務局長)

ホームページ担当： 山崎 義行(報道部長)、安達 信男(幹事)